



Title	コリャーク語の形態的特異性と語類画定 : 2つのタイプの副詞節に着目して
Author(s)	呉人, 恵; Kurebito, Megumi
Citation	北方言語研究, 15, 125-140
Issue Date	2025-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/112974
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94618
Type	departmental bulletin paper
File Information	07_Kurebito.pdf



コリヤーク語の形態的特異性と語類画定 —2つのタイプの副詞節に着目して—

呉 人 恵

(北海道立北方民族博物館)

キーワード：コリヤーク語、形態的特異性、語類画定、副詞節、動詞語幹

1. はじめに

本稿では、コリヤーク語 (Koryak) において格接辞を用いて副詞節を作る2つのタイプの形式に着目することで、語類画定の問題点を浮かび上がらせ、その解決策を探る。2つのタイプとは、下の①②である。①のタイプでは、動詞語幹が名詞化を経て格接辞と結びつく。このタイプを便宜的に、「名詞化型」と呼び(呉人 2016:1)、名詞化された語幹を「名詞化型語幹」と呼ぶ。これに対して、②のタイプでは、動詞語幹が名詞化を経ないまま直接、格接辞と結びつく。このタイプを便宜的に、「非名詞化型」と呼び(呉人 2016:1)、名詞化されない語幹を「非名詞化型語幹」と呼ぶ。

① <動詞語幹+名詞化接辞+格接辞>タイプ (名詞化型)

e.g. 方向格：時間節 (-kena-jtəŋ 「～する前に」「～するまで」 [-kena 属格])

方向格、与格、場所格：目的節 (-nv-etəŋ/-nv-ə-ŋ/-nv-ə-k 「～するために」 [-nv 「場所」])

② <動詞語幹+格接辞>タイプ (非名詞化型)

e.g. 場所格：時間節、原因節、順接条件節、逆接条件節

道具格：時間節、原因節、様態節

与格：様態節、引用節を導く副詞節

共同格：時間節

(1a)(1b) は名詞化型、(2a)(2b) は非名詞化型の例である。下線部が該当箇所である (以下同様)¹。

- (1a) ʕəm-tal na-ko-n-etet-aw-ŋəvo-ŋ-ə-n,
bone-crush(ABS.SG) INV-IPF-CAUS-boil-CAUS-HAB-IPF-E-3SG.P
oty-at-kena-jtəŋ.
soft-VBL-GEN-ALL

¹ 例文の出典で、たとえば、「4/335」のようにスラッシュで示されているのは、テキスト記載の例文番号である。「呉人 (2016: 頁)」とあるのは、インフォーマント Ajatginina Tat'jana Nikolaevna (1955-) さんから聞き取った例文のうち、論文としてすでに刊行されているものである。K.I.G. は、インフォーマント Kechgelxut Irina Gergol'tagovna (1936-2017) さんのイニシャル、A.T.N.は、Ajatginina Tat'jana Nikolaevna (1955-) さんのイニシャルで、それぞれの方からの聞き取りで得られた未発表の例文であることを示す。

「彼らは砕いた魚の骨を柔らかくなるまで煮た」(Kurebito ed. 2014:4/335)

- (1b) jəqmitiw ə-nan k-ena-n-ə-kj-aw-ŋəvo-ŋ
in.the.morning 3SG-ERG IPF-1SG.P-CAUS-E-wake.up-CAUS-HAB-IPF
mely-at-ə-nv-ə-ŋ.
fire-VBL-E-place-E-DAT

「朝、彼／彼女は火を焚くために私を起こす／起こした」(呉人 2016:7)

- (2a) jajt-ə-k, kəta t-ewji-k.
return-E-LOC only 1SG.S-eat-1SG.S

「帰ってから、ようやく私は食べた」(K.I.G.)

- (2b) en'pic ajaŋo-ma, ɣəmmo t-ə-ku-te-picɣ-ə-ŋ-ə-ŋ.
father(ABS.SG) hook-COM 1SG.ABS 1SG.S-E-IPF-make-food-E-make-E-IPF

「父が釣りしている間、私は食事の支度をしている／いた」(呉人 2016:12)

(1a) では、動詞語幹 *oty-at* 「柔らかくする」に属格接尾辞 *-kena* が直接接続している。後述の 4.2 で見る通り、属格接尾辞は名詞語幹だけでなく、このように動詞語幹につく点で特異であるが、数・格により屈折することから、名詞的であり、ここでは名詞化の機能を担っていると言える。(1a) ではこの名詞化した語幹にさらに方向格接尾辞 *-jtəŋ* がついているのである。(1b) では「場所」の意味の *-nv* が動詞語幹 *mely-at* 「火を焚く」の名詞化を担っており、これに与格接尾辞 *-ŋ* がついている。一方、(2a) では、*jajt* 「帰る」に直接、場所格接尾辞 *-k* が、(2b) では *ajaŋo* 「釣りする」に直接、共同格接尾辞の *-ma* がついている。

格接辞は通常、名詞語幹につくとされる。しかし、非名詞化型では、これまで動詞とされてきた語幹が直接、格接辞につく。そこで、このような形態的特異性をどのように考えるべきかが問題になる。すなわち、

- A) 非名詞化型語幹は従来通り動詞語幹としてよいのか、あるいは名詞・動詞兼務語幹とするべきなのか？
B) このような形態的特異性は非名詞化型にだけ特化された例外的なものなのか、あるいは、より広範にみられ、コリャーク語の形態法を特徴づけるものなのか？

といった疑問が生じる²。本稿では、この 2 点に対する答えを探ることを主たる目的とする。

ちなみに、先行研究では、名詞化型、非名詞化型の語構成の違いは問わず、格接辞を取るという共通点だけで同一の「動詞の名詞的形式 *imennye formy glagola*」、すなわち、動詞の下位カテゴリーに位置づけている (Zhukova 1972)。これに対し、本稿では、むしろ両者の語構成の違いに着目し、とりわけ非名詞化型の形態的特異性の検討を通して両タイプの語類を画定する。

² そもそもコリャーク語における格接辞は一般にいう格接辞とは違うのではないかとの疑問もありうる。これについても詳細に再検討する余地はあるが、当該接辞は、述語と名詞句の間の関係を表わす名詞の形態的特徴を示すという点では、一般的な格接辞として問題はないと考え、本稿ではそのような疑問はひとまず取り上げない。

本稿の構成は次の通りである。第2節では、非名詞化型の形態的特異性を記述し、語幹レベルと語レベルを区別し形態的基準により語類画定をおこなうことを提案する。第3節では、非名詞化型を名詞・動詞兼務語幹 *nike/neka*³「何、何する」と比較し、その異同を明らかにしたうえで、非名詞化型語幹が名詞・動詞兼務語幹ではなく、動詞語幹であると結論づける。あわせて、名詞化型語幹を語類の中でどのように位置づけるかについても検討する。第4節では、非名詞化型と共通する形態的特異性を持つ複数の形式を挙げ、このような形式がコリャーク語の形態法を特徴づける重要なものであり、語類画定においても無視できないことを指摘する。第5節では総括をおこなう。

2. 非名詞化型の形態的特異性

コリャーク語の参照文法である Zhukova (1972) は、語類を名詞 (*imja sushshestvitel'noe*)、形容詞 (*imja prilagatel'noe*)、動詞 (*glagol*)、代替詞 (*slova-zamestitel'*)、数詞 (*imja chislitel'noe*)、副詞 (*narechie*)、モーダルな語 (*modal'nye slova*)、間投詞 (*mezhdometija*)、小詞 (*chastitsy*)、接続詞 (*sojuzy*) の10種類に分類している。上述の通り、名詞化型、非名詞化型はともにこのうち動詞の下位カテゴリーとして動詞の名詞的形式のひとつに分類されている。具体的には、名詞化型では目的節を作る *-nv-etəŋ*, *-nv-ə-ŋ*, *-nv-ə-k*「～するために」は目的分詞 (*supin*)、非名詞化型は副動詞 (*deeprichastie*) とされている。ただし、名詞化型で時間節を作る *-kenajtəŋ*「～する前に」「～するまで」については記述がない。また、名詞化型、非名詞化型をなぜひとくくりに動詞の名詞的形式に分類するのか、その根拠についても明確に述べられていない。

しかし、動詞語幹が格接辞と直接結びつくという、非名詞化型が示す形態的特異性は、動詞と名詞の区別にかかわる重要な特徴であるため、名詞化型と非名詞化型を十把一絡げに論じるべきではないと考える。

そこで、以下ではまず、非名詞化型のふるまいについて、上述の (2a) の場所格接辞、(2b) の共同格接辞以外の格接辞による例も見ながら観察する。コリャーク語の斜格には、場所格、道具格、与格、方向格、共同格、奪格、沿格、接触格、原因格、様態格、属格がある。このうち非名詞化型に使われるのは、管見の限り、場所格、道具格、与格、共同格の5つの接辞である。(3) は道具格 *-a*、(4) は共同格 *yajqə-..-a* がつく例であるが、いずれも様態を表わす。両者の細かいニュアンスの違いについては現時点では不明である。(5) は与格 *-ŋ* がつき、引用節を導入する。副詞節を形成する際に各接辞が表わすその他の意味について、詳しくは呉人 (2016) を参照されたい。

- (3) *am-jəkcav-a*, *t-ə-ko-lajv-ə-ŋvo-ŋ* *yəmyənqo*.
 only-hurry-INS 1SG.S-E-IPF-walk-E-HAB-IPF here.and.there
 「私は急いであちこち歩いている／いた」(呉人 2016:12)
- (4) *muju* *ammanəŋ* *mət-ko-yəntaw-la-ŋ*, *yajq-ə-tejŋ-a*.
 1PL.ABS everywhere 1PL.S-IPF-run.away-PL-IPF COM-E-cry-COM

³ 母音調和による異形態はスラッシュで表わす。

「私たちは泣きながらあちこちに逃げている／いた」 (Kurebito ed. 2016: 12/11)

- (5) *ev-ə-ŋ*, “*cəmkəp* *ŋellə* *t-ə-j-ekmin-ŋ-ə-n*”.
say-E-DAT half reindeer.herd(ABS.SG) 1SG.A-E-POT-take-POT-E-3SG.P
「言うに、『私は群れの半分をもらおう』」 (Kurebito ed. 2014:5/27)

ところで、語類は、「語根ないし語に対して語彙的に指定されるカテゴリー」(下地 2019:124) (下線は呉人) であるとされる。一方、コリャーク語の非名詞化型のように、語根と同じあるいは語根から派生された語幹のレベルでは動詞なのに、語のレベルでは名詞的であるといったような不一致が見られる場合には、「語幹ならびに語に対して語彙的に指定されるカテゴリー」とするべきであるということになる。つまり、語幹レベル、語レベル両方で語類画定が必要になってくるのである。そこで、「語幹ならびに語に対して」どのような手順で語類を指定するのかが問題となる。

結論を先取りすると、筆者は、コリャーク語の語類画定の基本方針として、語幹レベルと語レベルを区別し、

- ① 語幹レベル→語レベルの順に語類を画定する
- ② その際、基本的には形態的基準に依拠する

という2点を提案する。

3. 非名詞化型の語類

本節では、非名詞化型の語類を、語幹レベルと語レベルに分け、形態的基準に依拠しながら検討する。その際、品詞転換のひとつである名詞・動詞兼務語幹 *nike/neka* 「何、何する」の形態的ふるまいと比較する。

3.1. 語幹レベルでの語類

3.1.1. 名詞・動詞兼務語幹 *nike/neka* の形態的ふるまい

非名詞化型語幹は動詞屈折接辞と直接結びつきうるため、動詞語幹であることは疑問の余地がない。たとえば、上の (2a) の非名詞化型の例で見た自動詞語幹 *jajt* 「帰る」は、(6a) では不完了を表わす *ko-.-ŋ*、(6b) では1人称単数主語を表わす *t-.-k*、(6c) では1人称複数主語を表わす *mət-*、主語の複数性を表わす *-la* などの動詞屈折接辞と結びついている。

(6a) *ko-jajt-ə-ŋ*

IPF-return-E-IPF

「あなた／彼／彼女は帰っている／いた」

(6b) *t-ə-jajt-ə-k*

1SG.S-E-return-E-1SG.S

「私は帰った」

(6c) *mət-jajt-ə-la*

1PL.S-return-E-PL

「私たちは帰った」

ただし、それだけではこれらの動詞語幹が名詞語幹を兼務しないとする根拠にはならない。そう断定するためには、他の名詞・動詞兼務語幹との異同を確認しておく必要がある。コリャーク語には、名詞・動詞兼務語幹の数少ない例として、*anjja*「答え、答える」、*pəŋlo*「質問、質問する」、*emjɔl*「悲しみ、悲しむ」、*moyyola*「吠え、吠える」、*nike/neka*「何、何をする」などが認められている⁴。以下では、このうち *nike/neka*「何、何する」を取り上げ、非名詞化型語幹との形態的ふるまいの異同を探る。

nike/neka は、ある事物、人、場所、行為などについて思い出そうとして思い出せない時、それらを表わす具体的な語彙形式の代わりに使われるとされる (Zhukova 1972)。

まず、名詞としてふるまう場合を見る。*nike/neka* は絶対格では他の名詞同様、単数、双数、複数を区別する。すなわち、*nikə* (単数)、*nike-t* (双数)、*nike-w* (複数) である。(7) は単数、(8) は双数、(9) は複数の例である。

- (7) *ŋaje-n* *pəŋa-tʃul*
 that-ABS.SG dry-piece(ABS.SG)
na-ko-n-ə-pəŋa-w-ŋəvo-ŋ-ə-n *nikə*
 INV-IPF-CAUS-E-dry-CAUS-HAB-IPF-E-3SG.P what(ABS.SG)
cicy-ə-tʃul to *ʃətʃəm-janv-o* *wocel*
 fillet-E-piece(ABS.SG) and bone-row-ABS.PL here
na-ko-pan-ŋ-ə-naw *ʃopta*
 INV-IPF-boil-IPF-E-3PL.P also
na-ko-n-ə-pəŋa-w-ŋəvo-ŋ-ə-n *tət*
 INV-IPF-CAUS-E-dry-CAUS-HAB-IPF-E-3SG.P in.order.to
ʃatkeŋ-at-ka.
 bad-VBL-NEG

「彼らは腐らないように、その干し肉を、何を、細切り肉を、骨を煮たり干したりして
 いる／いた」 (Kurebito ed. 2024:5/302)

- (8) *nike-t* *pəlak-ə-t* *ya-mal-qit-ə-linat* *ləyan məjew* *ŋajŋən*
 what-ABS.DU boot-E-ABS.DU FP-well-freeze-E-3DU.S even because outside
ŋanko qejaɭ'ɣ-ə-cəko *jaleko-cʃat-ə-lʃat-ə-k*.
 there chill-E-inside slide.down.the.hill-DUR-E-DUR-E-LOC

「外は滑るには寒かったので、えーとほら何が、私のブーツが凍ってしまっていた」
 (Kurebito ed. 2024:11/19)

- (9) to *nike-wwi* *ʃamin jəcca-wwe* *na-ko-pan-ŋ-ə-naw* *ponta-w*.
 and what-ABS.PL look lung-ABS.PL INV-IPF-boil-IPF-E-3PL.P liver-ABS.PL
 「そして、彼らは何を、ほら肺を煮ている／いた、肝臓を。」 (Kurebito ed. 2024:5/326)

⁴ この他、*vetat*「仕事／働く」、*weqet*「一歩／歩く」なども品詞転換の例として挙げられるが、これらは動詞化接尾辞 *-et/-at* を伴っている。共時的には品詞転換の例としてよいであろうが、通時的には成り立ちが異なると思われる。

nike/neka はまた、すべての斜格を取ることができる。(10) は場所格、(11) は道具格、(12) は与格、(13) は方向格、(14) は共同格、(15) は奪格、(16) は沿格、(17) は接触格、(18) は原因格、(19) は様態格、(20) は属格を取る例である。

- (10) nike-k internat-ə-k muju
 what-LOC boarding.school-E-LOC 1PL.ABS
 na-ko-n-awj-an-ŋəvo-la-mək tewʃel-e.
 INV-IPFV-CAUS-eat-CAUS-HAB-PL-1PL.P dried.fish-INS
 「えーとほら、どこで、寄宿舎学校で、彼らは私たちが干し魚で養っている／いた」
 (Kurebito ed. 2024:5/154)
- (11) en'pici-te tejk-ə-ni-n ott-ə-ja-n waca
 father-INS(ERG) make-E-3SG.A-3SG.P wood-E-house-ABS.SG sometimes
nike-te ku-jəcʃen-ŋ-ə-ni-n meyo-ta.
 what-INS IPF-fill-IPF-E-3SG.A-3SG.P moss-INS
 「父は木の家を作り、時に何かで、苔で隙間を塞いだ」(A.T.N.)
- (12) ənniw wutqen ʃeqev-i tajjatənv-etəŋ amu neka-ŋ
 uncle(ABS.SG) today go-3SG.S fishing.camp-ALL probably what-DAT
 ʃejənv-ə-ŋ təle-j.
 ford-E-DAT approach-PF
 「叔父は今日、フィッシングキャンプに行き、多分、何に、浅瀬にやってきた」(A.T.N.)
- (13) to ujje etʃu ɣəm-nan liyi e-lŋ-ə-ke miŋkəje ŋanko,
 and not also 1SG-ERG remember NEG-regard-E-NEG how there
 tite mət-jajt-ə-la neka-jtəŋ pas'oloka-jtəŋ.
 when 1PL.S-return-E-PL what-ALL village-ALL
 「そして、私はまたどうやってあそこにいつどこに、村に来たのか覚えていない」
 (A.T.N.)
- (14) appapo to vava jet-ɣəʃe ŋalvəʃ-ə-ŋqo
 grandfather(ABS.SG) and grandmother(ABS.SG) come-PF reindeer.herd-E-ABL
ɣe-nike-te ɣawən-jamkəʃ-ə-ma.
 COM-what-COM COM-guest-E-COM
 「おじいさんとおばあさんはトナカイの群れから誰と、客人と一緒にやってきた」
 (A.T.N.)
- (15) məlav-ə-lʃ-o jal-la-j moskva-ŋqo to metke
 dance-E-PART-ABS.PL come-PL-PF Moskow-ABL and possibly
neka-ŋqo k-ew-la-ŋ meŋqi amu etʃu ɣa-tva-lenaw.
 what-ABL IPF-say-PL-IPF from.where probably also FP-be-3PL.S
 「ダンサーたちはモスクワやどこからか来て、多分ほかにもいたそうだ」(A.T.N.)
- (16) vava ev-ə-ŋ, “ɣajmat javac t-ə-j-en'ajace-ŋ
 grandmother(ABS.SG) say-E-DAT probably later 1SG.S-E-POT-visit-POT

el'ʕa-tomy-etəŋ, to ʔajmat neka-ɟəŋ t-ə-ja-ta-n
 woman-friend-ALL and probably what-PRL 1SG.A-E-POT-pass-3SG.P
 mel'q-epəŋ".
 drying.rack-PRL

「おばあさんが言うに、「私はたぶん後で女友達を訪ねようと思っている。たぶん、何
 を通って、魚干し棚を通して行くよ」(A.T.N.)

- (17) ɟavakəka-ta əlla unmək teqən nike-jite
 daughter-INS(ERG) mother (ABS.SG) very.much as.if what-CONT
 ecʕolŋ-ə-jeta ku-tiŋu-ŋ-ni-n.
 skirt-E-CONT IPF-pull-IPF-3SG.A-3SG.P

「娘は母の何を、スカートを思い切り引っ張っている／いた」(A.T.N.)

- (18) əjəm unmək ʔe-jiʕel-lin, məjew nike-kjit
 boss(ABS.SG) very.much FP-be.glad-3SG.S because what-CA
 vetat-ə-lʕ-o metʕaŋ ko-vetal-la-ŋ.
 work-E-PART-ABS.PL well IPF-work-PL-IPF

「ボスはとても喜んだ、なぜならば何だから、労働者たちがよく働いている／いたから
 だ」(A.T.N.)

- (19) ellʕ-a ku-nnitʕew-ŋ-ə-ni-n naly-ə-n nike-nu
 mother-INS(ERG) IPF-tan-IPF-E-3SG.A-3SG.P skin-E-ABS.SG what-ESS
 icʕ-ə-lqəl-u ʕojacek-ə-ŋ.
 fur.coat-E-something.planned.to.be-ESS man-E-DAT

「母は毛皮を何に、毛皮コートに、男のために鞣している／いた」(A.T.N.)

- (20) nike-n mucy-in jaja-ŋa qonpəŋ en'pici-te
 what-GEN 1PL-GEN house-ABS.SG always father-INS(ERG)
 na-k-ew-ŋəvo-la-mək, "metʕaŋ q-ə-ʔənnə-la-jkəne-ʔətkə".
 INV-IPF-say-HAB-PL-1PL.P well OPT.2SG.A-E-take.care.of-PL-IPF-2A

「誰の、私たちの家はいつもきれいにしておくようにと父が言っていた」(Kurebito ed.
 2024:5/218)

次に動詞としてふるまう場合を見る。nike/neka は動詞屈折接辞を自由にとることができる。(21) は3人称複数主語・不完了相の例、(22) は3人称単数目的語・事実叙述⁵の例、(23) は反転・1人称複数目的語・完了相の例、(24) は2人称単数主語・希求法の例である。

- (21) to ala-k ʕopta əcy-in ənn'aq wəjo-tko-ta
 and summer-LOC again 3PL-GEN now sling-do.with-INS

⁵ ye-...lin は、Zhukova (1972:234) では間接体験を表わす過去時制とされているが、筆者は、必ずしも過去の出来事や間接体験を表わすわけではないことから、出来事を時間に限定されない、固定した事実としてとらえる形式、すなわち、「事実叙述」形式であるとしている（呉人 2021:49）。

ko-neka-nvo-la-n ʃopta ləvəcet-ə-k.

IPFV-do.what-HAB-PL-IPF again compete-E-LOC

「そして、夏にも彼らは石投げで、また何して、競っている／いた」(Kurebito ed. 2024:7/21)

- (22) emʃu qun mucy-in jaja-ŋa qonpəŋ metʃaŋ ye-nike-lin.
so PRT 1PL-GEN house-ABS.SG always well FP-do.what-3SG.P

「だから、いつも私たちの家をきれいに何した」(Kurebito ed. 2024:5/224)

- (23) to ekil' ʃat na-joʃ-ə-la-mək, na-neka-la-mək
and here PRT INV-approach-E-PL-1PL.P INV-do.what-PL-1PL.P
na-cwet-ə-np-ə-la-mək.
INV-branch-E-poke-E-PL-1PL.P

「そして、ほら彼らは私たちのところにやってきて、私たちを何した、枝で突いた」
(Kurebito ed. 2024:12/19)

- (24) əcci q-ə-nike-jki, q-ə-tava-cijt-eke,
or OPT.2SG.S-E-do.what-2SG.S OPT.2SG.S-E-soften-ANTP-2SG.S
pann'a-w q-ə-tava-jkenaw.
shin.skin-ABS.PL OPT.2SG.A-E-soften-3PL.P

「あるいはあなたは何しなさい、鞣しなさい、脛皮を鞣しなさい」(Kurebito ed. 2024:8/27)

3.1.2. 非名詞化型語幹と nike/neka の異同

以上、名詞・動詞兼務語幹 *nike/neka* の名詞としてのふるまい、動詞としてのふるまいを観察した。その結果、非名詞化型語幹は、名詞としてふるまう場合には自由に斜格を取れる点、動詞としてふるまう場合には自由に動詞屈折接辞を取れる点で、*nike/neka* と共通していることが明らかになった。唯一の違いは、*nike/neka* は絶対格を取れるが⁶、非名詞化型語幹は取れないという点である。非名詞化型語幹は、名詞化接辞 *-yəjŋ* を介さなければ絶対格を取ることはできない。(25) では、語末の *-n* が絶対格単数を表わす。

- (25) *jajt-ə-n/ jajt-ə-yəjŋ-ə-n 「帰宅 (ABS.SG)」
*ajaʃot-ə-n/ ajaʃot-yəjŋ-ə-n 「釣り (ABS.SG)」

以上のことは、コリャーク語では名詞に認定されるためには、絶対格を取ることが必須であるということを示唆する。すなわち、*nike/neka* は名詞としても動詞としても完全な形態的特徴を有する一方で、非名詞型は動詞としては完全であるが、名詞としては絶対格を欠くという点で不完全なのである。ここで初めて、非名詞化型は、名詞・動詞兼務語幹ではなく、動詞語幹であると結論づけられる。

一方、名詞化型は非名詞化型と異なり、名詞化した語幹が絶対格を取ることができる。た

⁶ 上述の他の名詞・動詞兼務語幹 *anjia* 「答え／答える」、*pəŋlo* 「質問／質問する」、*emjɔl* 「悲しみ／悲しむ」、*moyyola* 「吠え／吠える」なども、名詞化接辞を介さずに絶対格を取ることができる (e.g. *anjia-n* 「答え [ABS.SG]」、*pəŋlo-n* 「質問 [ABS.SG]」、*emjɔl* 「悲しみ [ABS.SG]」、*moyyola-n* 「吠え [ABS.SG]」)。

例えば、(1a) の *oty-at-kena-jtəŋ* 「柔らかくなるまで」の *oty-at-kena* は *oty-at-ken* 「柔らかくなるための (ABS.SG)」、(1b) の *mely-at-ə-nv-ə-ŋ* 「火を焚くために」の *mely-at-ə-nv* は *mely-at-ə-nə* 「火を焚くところ (ABS.SG)」など絶対格を取ることができる。したがって、格接辞がつくのは動詞語幹ではなく、名詞語幹であるということになる。

3.2. 語レベルでの語類

次の手順として、非名詞化型の語レベルの語類を画定する。すると、非名詞化型語幹は動詞的には屈折せずに格接辞を伴うことから、定形動詞には分類できず、動詞の名詞的形式として非定形動詞に分類されることになる。とはいえ、格接辞から派生した用法を、従来通り、「副動詞」と呼ぶことが妥当かどうかは検討の余地があるであろう。一方、名詞化型は名詞化した語幹に格接辞がつくため、動詞の名詞的形式ではなく名詞の格変化形のひとつであると考えられる。かくして、両者は名詞と動詞の別々の語類に振り分けられることになる。以上をまとめると、下表1のようになる。

表1 名詞化型と非名詞化型の語幹・語の語類

	語幹レベル	→	語レベル
名詞化型	名詞	→	名詞の格変化形
非名詞化型	動詞	→	動詞の名詞的形式

3.3. 語類画定に統語的基準を採用しない理由

ところで、語類画定には一般に形態的基準のみならず統語的基準が採用される。しかし、名詞化型、非名詞化型には、統語的基準は必ずしも有効ではない。両タイプとも、定形動詞同様に名詞項を支配することができるためである。(26) は名詞化型、(27) は非名詞化型が自動詞主語を支配している例である。

(26) *wejem* *qet-ə-kena-jtəŋ*, *mət-k-ajaŋo-ŋvo-la-ŋ*.

river(ABS.SG) freeze-E-GEN-ALL 1PL.S-IPF-fish-HAB-PL-IPF

「川が凍るまで、私たちは釣りをしている／いた」(呉人 2016:5)

(27) *kəta* *en'pici-w* *wojv-ə-ŋqo* *jet-ə-k*, *vitku* *məc-ca-jaly-ə-la-ŋ*

only father-ABS.PL village-E-ABL come-E-LOC first 1S-POT-move-E-PL-POT

ŋalvəŋs-ətəŋ.

reindeer.herd-ALL

「両親が村から戻ってきたら、私たちは群れに移動しよう」(呉人 2016:7)

4. 類似の形態的特異性を持つ他形式

以上、名詞化型、非名詞化型の語類画定について検討を加えたが、複数の語類語幹と結びつきうるという形態的特異性のゆえに語類画定が問題となるのは、非名詞化型だけではない。コリャーク語には、同様の形態的特異性をもつ形式が、他にも次のように大きく4種類ある。

- I. 属性叙述 n-.-qin(e)/-qen(a)
- II. 属格 -kin(e)/-ken(a)
- III. 所有・事実叙述 ye-/ya-.-lin(e)/-len(a)
- IV. 動作主・被動作主名詞 -ls

詳細は呉人 (2009) に譲るとして、以下ではそれぞれの形式の特徴について略述する。

4.1. n-.-qin(e)/-qen(a)

n-.-qin(e)/-qen(a) は、Zhukova (1972) では性質形容詞とされる、属性叙述形式である（呉人 2010）。形容詞語根 (28) のみならず、名詞語幹 (29)、副詞語幹 (30)、動詞語幹 (31) を裸のまま直接、接合させることができる。主名詞を修飾したり、述語になったりする。

(28) 形容詞語根⁷

- n-ə-mejəŋ-qin 「大きい」 (mejəŋ 「大きい」)
- n-ə-tuj-qin 「新しい」 (tuj 「新しい」)
- n-ə-mel-qin 「よい」 (mel 「よい」)

(29) 名詞語幹

- n-ə-muqe-qin 「雨がちの」 (muqe 「雨」)
- n-ə-ktey-qen 「風の多い」 (ktey 「風」)
- n-ə-jəŋa-qen 「霧深い」 (jəŋa 「霧」)

(30) 副詞語幹

- n-ə-juleq-qin 「(時間的に) 長い」 (juleq 「長く」)
- n-inŋe-qin 「早い」 (inŋe 「早く」)

動詞語幹から作られる n-.-qin(e)/-qen(a) は、他の語類に比べ、最も生産的である。ちなみに同系のチュクチ語でこの形式は、属性叙述以外に、動詞の屈折形式のひとつとして、発話時点まで続いてきた習慣的動作、過去における進行中の動作、不特定過去などを表わすとされている (Skorik 1977)。能格的で、自動詞の場合には動作主の、他動詞の場合には被動作主の属性を表わす。たとえば、(31) の n-ewji-qin 「大食いの」の ewji は自動詞の「食べる」であり、動作主の属性を表わす一方で、n-ə-nu-qin の nu は他動詞の「食べる」であり、被動作主の属性を表わす。

⁷ 他の語類と派生関係のない純然たる形容詞であるという意味で「語根」とする。これらの語根は語幹合成において名詞を修飾するだけでなく、形容詞や動詞を副詞的に修飾するため、厳密には「形容詞・副詞兼務語根」と言うべきかもしれない。

e.g. mejŋ-ə-jaja-ŋa 「大きい家 (ABS.SG)」
 big-E-house-ABS.SG
 mejŋ-inŋe 「とても早く」
 very-early
 ko-majŋ-ə-ta-wona-ŋ-ŋəvo-la-ŋ
 IPF-many-E-make-pine.cone-make-HAB-PL-IPF
 「彼らはたくさん松ぼっくりを集めている／いた」

(31) 動詞語幹

n-ewji-qin 「大食いの」(ewji 「食べる (自)」)

n-ə-nu-qin 「食べられる」(nu 「食べる (他)」)

一方、語レベルでは、n-..-qin(e)/-qen(a) は斜格を取ることはできないが、(32) で見る通り、名詞同様、絶対格単数、双数、複数を区別し、主名詞と一致する。この点で、n-..-qin(e)/-qen(a) は不完全ではあるが、名詞的である。

(32) n-ewji-qin kəmiŋ-ə-n 「大食いの (1 人の) 子ども (ABS.SG)」

n-ewji-qine-t kəmiŋ-ə-t 「大食いの (2 人の) 子ども (ABS.DU)」

n-ewji-qine-w kəmiŋ-u 「大食いの (3 人以上の) 子ども (ABS.PL)」

ちなみに、Stassen (1997) は n-..-qin(e)/-qen(a) のこのような名詞的性格から、n- を名詞化接頭辞としているが、n-..-qin/-qen は上述の通り名詞語幹にもつくため、この主張は妥当ではない。

4.2. -kin(e)/-ken(a)

属格の -kin(e)/-ken(a) は、名詞語幹 (33)、副詞語幹 (34)、動詞語幹 (35) を直接、接合させることができる。

(33) 名詞語幹

wejem-kin 「川の」(wejem 「川」)

nute-kin 「ツンドラの」(nute 「ツンドラ」)

Pojt-ə-ken 「パレニ (地名) の」

(34) 副詞語幹

wutke-kin 「ここの」(wutke 「ここに」)

janot-ken 「先頭の」(janot 「初めに」)

ajŋon-ken 「昔の」(ajŋon 「昔」)

(35) ewji-kin 「食べるための」(ewji 「食べる (自)」)

lejv-ə-kin 「歩くための」(lejv 「歩く」)

qoɟalʂat-ken 「トナカイ放牧のための」(qoɟalʂat 「トナカイ放牧をする」)

一方、語レベルでは、-kin(e)/-ken(a) は絶対格で単数の -kin/-ken、双数の -kine-t/-kena-t、複数の -kine-w/-kena-w を区別する。加えて、場所格、道具格、与格、方向格、沿格などの格接辞を取ることから、名詞的である。

4.3. ʎe-/ʎa-..-lin (e)/-len(a)

ʎe-/ʎa-..-lin(e)/-len(a) は、名詞語幹 (36)、動詞語幹 (37) を裸のまま接合させることができる。名詞語幹に接合する場合には「～が多い」「～をもった」の意味を表わす。動詞語幹に

接合する場合については、Zhukova (1972:234) は「過去時制 II (間接体験)」として定形動詞の屈折体系に組み込んでいるが、呉人 (2021) は事象叙述に対して、時間に限定されない固定した事実を叙述する「事実叙述」であるとする。

(36) 名詞語幹

ye-miməl-lin 「水の多い」

γ-utt-ə-lin 「木の多い」

(37) 動詞語幹

ye-lq-ə-lin 「行った」

γ-ekmil-lin 「取った」

一方、語レベルでは、斜格は取れないが、絶対格で単数の ye-/ya...-lin/-len、双数の ye-/ya...-line-t/-lena-t、複数の ye-/ya...-line-w/-lena-w を区別することから、名詞的であるといえる。

4.4. -lɿ

-lɿ は、名詞語幹 (38)、形容詞語根 (39)、動詞語幹 (40) に直接つくことができる。名詞語幹に接合する場合には「～をもった (もの)」を基本義とし、そこから派生した「～に乗った (もの)」「～を着た (もの)」「～に住んでいる (もの)」などの意味も表わす。形容詞語根に接合する場合には、「より～の方の (もの)」を表わす。動詞語幹に接合する場合には、「～している (もの)」「～した (もの)」などを能格的に表わす。

(38) 名詞語幹

jənnə-lɿ-ə-n 「角のある (もの)」

nanq-ə-l'ɿ-ə-n 「妊娠中の (←腹を持った) (もの)」

yekeŋ-ə-lɿ-ə-n 「櫓に乗った (もの)」

icɿ-ə-lɿ-ə-n 「毛皮上着を着た (もの)」

(39) 形容詞語幹

ketyu-lɿ-ə-n 「強い方の (もの)」

ɲuj-ləɿ-ə-n 「弱い方の (もの)」

(40) 自動詞語幹

acacyat-ə-lɿ-ə-n 「笑っている／た (もの)」

jəlq-ə-lɿ-ə-n 「眠っている／た (もの)」

他動詞語幹

tejk-ə-lɿ-ə-n 「作られている／た (もの)」

təm-ə-lɿ-ə-n 「殺された (もの)」

一方、語レベルでは、絶対格で単数の -lɿ-ə-n、双数の -lɿ-ə-t、複数の -lɿ-ə-w を区別するだけでなく、斜格も自由に取ることができることから、これら 4 形式の中では最も名詞的であるといえる。

以上の4形式に共通するのは、次の2点である。

- ① 4形式ともに、語幹レベルでは少なくとも名詞語幹と動詞語幹には接合しうる
- ② 語レベルではいずれも程度の差はあれ、名詞的である

この2つの特徴は、非名詞化型とも共通している。すなわち、語幹レベルでは少なくとも名詞語幹と動詞語幹という複数の語類に接合することができ、語レベルでは名詞的である形式が、管見の限り少なくとも5種類はあることになる。このことは、コリャーク語においてこのような形態的特異性を踏まえた語類画定の検討が必要であることを示唆している。

ちなみに、非名詞化型による副詞節は、シベリアでは、コリャーク語を含むチュクチ・カムチャツカ語族、ユピック語、ユカギール語に見られるという (Anderson 2006)。ユピック語では、非名詞化型はシベリア側でのみ観察されていることから、チュクチ・カムチャツカ語族（おそらくチュクチ語）からの影響による可能性がある (呉人 2016)。一方、ユカギール語で非名詞化型とされる形式については、名詞化接辞 -l が子音始まりの格接辞の前で脱落した結果であるとのとらえ方がある (遠藤 2006、長崎 2013) (41)⁸。

(41) irkid'e taat modo-ni-de-ge, irkin foromo
 あるとき このように 暮らす-PL-(L)-POSS.3-LOC 1つの 人
 kel-l'el.

来る-IDEV:IND.INTR.3

「あるとき、[彼らが] そのように暮らしていると、1人の人がやってきた」

(長崎 2013:47)

両言語は地域的にも隣接しているため、なんらかの影響関係があった可能性は否定できない。とはいえ、コリャーク語の非名詞化型は、このように特定の音韻環境で現れるわけではない。理論的にはあらゆる動詞の裸語幹が格接辞と結びつきうるため、特殊事例ととらえることはできない。

5. おわりに

本稿では、コリャーク語の副詞節を形成する名詞化型と非名詞化型の2つのタイプの語幹の形態的な違いに着目し、両者ともに「動詞の名詞的形式」とする従来の説に対し、前者を名詞の格変化形、後者を動詞の名詞的形式とすべき根拠を論じた。具体的には、語類画定にあたっては、1) 語幹と語のレベルを区別する、2) 形態的基準を優先するという2つの方針が重要であることを指摘した。この方針は、名詞化型と非名詞化型の区別以外にも当てはまる。属性叙述 n-...-qin(e)/-qen(a)、属格 -kin(e)/-ken(a)、所有・事実叙述 ye-/ya-...-lin(e)/-len(a)、動作主・被動作主名詞 -l- も、語幹レベルでは少なくとも名詞語幹と動詞語幹に接合でき、

⁸ ただし、長崎郁氏は、現在はコリャーク語同様、このような例は非名詞化型と考えるのが妥当ではないかとの見解に傾いているとのコメントを、日本北方言語学会第7回大会での筆者の発表に寄せてくださった。

語レベルでは名詞的であるという共通する特徴をもつ。このことが、コリャーク語において名詞と動詞の境界線が緩いことを反映しているのか否かの解明は今後の課題であるが、従来、十分に議論されていないこのような形態的特異性を踏まえた語類画定の在り方が、今後は模索されなければならないであろう。

【謝辞】

本稿は、JSPS 科研費（課題番号：23K21929）の助成による研究成果のひとつとして、日本北方言語学会第7回大会（室蘭工業大学＋オンライン、2024/9/22）でおこなった発表内容に適宜修正を加えたものである。本稿の執筆にあたって、コリャーク語のデータを提供してくださったお二人のインフォーマント、故 Kechgelxut Irina Gergol'tagovna さん、Ajatginina Tat'jana Nikolaevna さんの惜しめない協力で謝意を表す。また、発表に対して貴重なご指摘をくださった方々、本稿に対して重要なご教示ならびにコメントをくださったお二人の査読者の方には心から感謝の意を表す。

【略語・略号】

コリャーク語

A=agent-like argument	ABL=ablative	ABS=absolutive	ALL=allative
ANTP=antipassive	CA=causal	CAUS=causative	COM=comitative
CONT=contactive	DAT=dative	DU=dual	DUR=durative
E=epenthesis	ERG=ergative	ESS=essive	FP=fact predication
GEN=genitive	HAB=habitual	INS=instrumental	INV=inverse
IPF=imperfect	LOC=locative	NEG=negative	NML=nominalizer
OPT=optative	P=patient-like argument	PART=participle	PF=perfect
PL=plural	POT=potential	PRL=prolative	PRT=particle
S=intransitive subject	SG=singular	VBL=verbalizer	
ユカギール語			
IDEV=間接証拠	IND=直説法	INTR=自動詞	L=L 分詞
LOC=位格	PL=複数	POSS=所有人称	3=3 人称

【参考文献】

- Anderson, G. D. S. (2006) Towards a Typology of the Siberian Linguistic Area. In Y. Matras, A. McMahon and N. Vincent (eds.) *Linguistic Areas: Convergence in Historical and Typological Perspective*, 266-300. Houndmills: Palgrave Macmillan.
- 遠藤 史 (2006) 『コリマ・ユカギール語の輪郭—フィールドから見る構造と類型』名古屋：三恵社.
- 呉人 恵 (2009) 「コリャーク語の形容詞—その動詞的および名詞的性格と類型論的位置づけ」『アジア・アフリカ言語文化研究』77: 35-62.
- 呉人 恵 (2010) 「コリャーク語の属性叙述—主題化のメカニズムを中心に」『言語研究』138:115-147.
- 呉人 恵 (2011) 「コリャーク語の名詞化：動作主・被動作主名詞の意味とシンタックス」『北方言語研究』1:41-62.

- 呉人 恵 (2014)「コリャーク語における動作名詞と動作主・被動作主名詞—名詞化の度合いに注目して—」『北方言語研究』 4: 43-64.
- 呉人 恵 (2016)「コリャーク語の副詞節：名詞化タイプと非名詞化タイプ」『北方言語研究』 13:1-23.
- 呉人 恵 (2021)「コリャーク語のデキゴトを表わす名詞的用法」『北方言語研究』 11: 37-54.
- Kurebito, Megumi (ed.)(2014) *Koryak Text 1*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, Megumi (ed.)(2016) *Koryak Text 2*. Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.
- Kurebito, Megumi (ed.)(2024) *Koryak Text 1 with Audio Materials (Revised Edition)*. *Northern Language Studies (Extra Issue 3)*, Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama. 222pp.
- 長崎 郁 (2013)「コリマ・ユカギール語の動詞屈折形式：分詞の統語機能と形態」『北方言語研究』 3: 41-54.
- 下地理則 (2019)「品詞」『明解方言学辞典』 125-126. 東京：三省堂.
- Skorik, P. Ja. (1977) *Grammatika chukotskogo jazyka II*. Moskva/Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjanskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo «Nauka».

Morphological Specificity and Word Classification in Koryak:
Focusing on Two Types of Adverbial Clauses

Megumi KUREBITO
(Hokkaido Museum of Northern Peoples)

Keywords: Koryak, morphological peculiarities, word class classification, adverbial clauses, verb stems

This study examines the morphological distinctions between nominalized and non-nominalized stems that form adverbial clauses in Koryak. It challenges the traditional classification of both types as “nominal forms of verb” and argues for categorizing the former as noun case forms and the latter as nominal verbs of non-finite verbs. The paper emphasizes two crucial principles in word classification: distinguishing between stem and word levels, and prioritizing morphological criteria.

The application of these two principles extends beyond the nominalized and non-nominalized types. Several linguistic elements, including property predication *n-..-qin(e)/-qen(a)*, genitive *-kin(e)/-ken(a)*, possessive/factual predication *ye-/ya...lin(e)/-len(a)*, and agent/patient noun *-lʃ*, exhibit a common characteristic. They can attach to both noun and verb stems at the stem level while maintaining a nominal nature at the word level. Whether this indicates a blurred boundary between nouns and verbs in Koryak requires further investigation. Nevertheless, the paper suggests exploring a word classification method based on these previously understudied morphological features.

(くれびと・めぐみ kurebito@hoppohm.org)